冬の夜ばなし

arco

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
冬の夜ばなし

【Ｎコード】
Ｎ４１９７ＢＡ

【作者名】
ａｒｃｏ

【あらすじ】
雪の夜の小さな一幕。
ホラーというより不思議議話です。

冬の夜ばなし

これは、母方の叔母から聞いた話でございます。

叔母はその時代の人にしてはハイカラな人でした。いえ、派手だったという意味ではありません。なんというか、進歩的とでも言えばいいのでしょうか、女性が大学へ進学することすら珍しかった頃に1人で渡米したことのある人でした。

そうです、考え方が新しかったのです。兎に角、叔母は母の兄弟の中でも抜きん出ている人でした。米国で身につけた豊富な知識と、ある意味冷めた感覚で物事を計る、そんな人です。

その叔母が話してくれたのです。

その日は祖母が亡くなり、母たち兄弟は祖母が生まれた時から過ごしたその家で、お通夜のご遺体の番をしていました。昔の話ですから、葬儀場で全てを済ませるようなことはいたしません。お通夜から葬儀まで、お寺へ運ぶまでにするようなことは自宅で行うのが普通でございます。

祖母は亡くなったばかり、ずっと長患いをしていたので兄弟たちも覚悟を決めていました。ですが、実際母親が息を引き取ってしまうと冷静ではいられません。兄弟たちは母親が育ち、自分たちが大きくなった古い家でしんみりとした夜を過ごしていました。

眠る刻限となりましたが、灯明をお守りするため、誰か1人は起きていなくてはいけません。順番に寝起きして行うこととなりました。

叔母は末っ子ですから、こういうとき年長者に逆らえません。米国で女性優先の文化に慣れた人ではありましたが、付け焼刃のことでもあります。幼い頃から身にしみついた習い性はそう簡単には拭いきれるものでもありません。とうとう夜の一番深い時間に割り当てられてしまいました。

深夜になり、すぐ上の姉である母の横に床を延べて眠っていると次兄が起こしに来ました。叔母の番だそうです。そうして叔母は亡くなった母親の傍へと参りました。

明かりは灯明だけでございます。亡くなったばかりの母親には白い布がかけられ、その死に顔は見えません。進歩的な叔母ですが、末っ子で可愛がられたこともあり母親を慕う気持ちは兄弟でも一番強いものでした。

ご遺体のそばにはべり、1人、母親へ心の中で語りかけておりました。

いつの間にか意識が少し飛んでいたそうです。気がつくと暗いはずの寝間の障子の向こうがほんのり明るい。時計をみるが朝には早い。何事だろうと、そっと障子を開けてみました。

祖母が亡くなったのは真冬のことでございます。しかし、雪は降ってはおりませんでした。もともと母の郷里あたりでは真冬でも雪のないことが当然でした。

障子を開けた叔母の目の前には一面の銀世界が広がっていたのでございます。

庭にある小さな石灯篭や花壇、祖母が入院するまで飼っていた犬の小屋など全てが白い雪に覆われています。月光の照り返しで明るい

と感じたのです。

知らぬうちに珍しい雪でも振ったのかと、見た光景で急に寒さを感じた叔母はブルリと震えました。が、一瞬ののちに驚きで固まることとなります。

庭の奥から、出し抜けに小さな子どもがでてきたのです。それも１人ではありません。

深夜に他所の家の庭に入り込んだ子どもたちは遊んでいるようでした。雪玉を作りぶつけ合い、小さな雪だるまをこしらえたりととても楽しげにしています。

叔母は呆然と見入っていましだが、やがてこれは飛んでもないことだと我に返ります。どこの子どもかわかりませんが、とても遊ぶような時間帯ではありません。すぐに注意して家へ帰るよう促さなくては。

窓の鍵へと手を掛けて、そこで初めて気がつきました。

――声が聞こえないのです。

子どもたちは楽しげに笑っています。何かを言い合っているのか、口が忙しく動いてもいます。屋外とはいえこんなに近いところにいるのです。ましてや他の物音のない深夜、聞こえないはずがありません。

フルリと先ほどとは違う悪寒がしました。そうしてよくよく子どもたちを見てみると、４人の女の子でした。歳はそれぞれ違うようでした。皆同じようなおかっぱ頭の可愛らしい子どもたちです。しか

し、おかしなことに戦時中のようなもんぺを穿いているのです。そんな子どもたちが無邪気に遊んでいます。

古臭い子どもがいたものだ。そこまで考えたところで叔母の目は恐怖で凍りつきました。

子どもたちの足元には―影がありませんでした。空にはあんなに煌々と月が輝いているというのに。

やがて1人の女の子の目が、縁側で身動きのとれなくなった叔母に向きました。目があった。そう思った途端、叔母は金切り声を上げて他の兄弟の眠る部屋へと走っていきました。

「それで、叔母様はどうされたのです？」

「ふふ…。兄弟たちを叩き起こして庭に連れて行ったそうです。しかし、行ってみた庭に子どもたちはいなかったそうです。それどころか積もっていたはずの雪すらありませんでした。叔母は夢でも見たのだろうと責められたそうです」

そう、今見ている庭がそうだ。昼間だと何の変哲もない、普通の庭。

「こちらでは滅多に雪が降らないそうですね…。叔母様はやはり夢をご覧になったと？」

「…戦時中のことです。この地方でも珍しいことに足で踏み跡をつけられるほどの大雪が降ったことがありました。もちろんこの家にも。きっとそれが懐かしかったんでしょうねえ。…祖母は4人姉妹の2番目、でも亡くなったのは他の姉妹が全て鬼籍に入った後のことでした。迎えが、来ていたのでしょう」

（後書き）

読んで下さってありがとございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4197ba/

冬の夜ばなし

2012年1月11日01時52分発行